

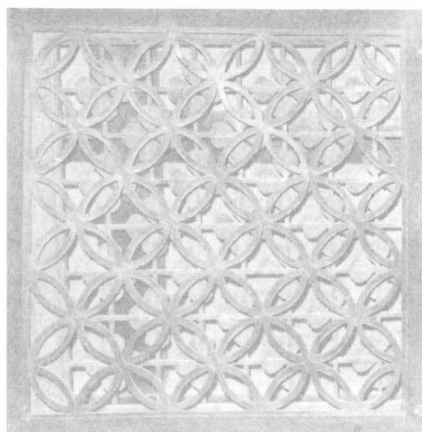
真田窓のある家

生方たつる

角川書店



生方たつる



真田窓のある家

角川書店

真田窓のある家

生方たつゑ



昭和五十八年七月五日 初版発行

発行者 角 川 春 樹

発行所 角 川 書 店

東京都千代田区富士見二―十三
《電》〇三(二六五)七二―一 大代表
《振》東京三―一九五二〇八《郵》二〇二

東洋印刷・宮田製本

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

0095-883140-0946(0)

真田窓のある家

*

真田窓のある家

生方たつゑ

目次

今しばらくは生きざらめやも

短歌への招待——二〇

今しばらくは生きざらめやも——二五

梅の花さくことはりを——二八

友がみなわれより——三二

春浅み——三四

みづうみの氷は解けて——三七

磨る墨のにほひ身に染む——三〇

咲く花のにほうがごとく——三三

幽に聞けば新妻のこゑ——三五

白鳥はかなしからずや——三六

牡丹花は咲き定まりて——四三

二度なけるほととぎす——四四

寂しき音す—— 四六

合歡の花ぞほの紅く—— 五二

吾が恋を知りていまさむ—— 五四

わが命めぐみたまへり—— 五七

平和への悲願は熱く—— 六〇

蜩のなく山里の—— 六三

くさぐさの秋の花咲く—— 六六

ゆふ風に萩むらの—— 六九

赤き蜻蛉にならましものを—— 七三

かすがのにおしてゐるつきの—— 七五

いのちいとほし—— 七六

灯を恋ひやまず—— 八二

上州の四季

風土に生きるもの—— 八六

三国峠に残る森—— 九〇

変りゆく風景——一二一

山の囁き——一〇四

道によせて——一〇五

利根川の山女——一〇九

花の春に——一一〇

春匂う——一一四

夏の花に思う——一二七

魅かれる野の花——一二〇

秋の香の——一二三

まぼろしの晩秋——一二五

霜つき暦——一二六

冬至の祭——一二〇

雪は妖しい——一二三

母の一言——一二五

私自身のために——一二二

煉炭——一二四

離れていった須恵器——一四七

真田窓のある家——一四九

坂のある町——一五三

さわやかに生きた女——一五三

私の人生——一五八

「禁芸碑」私考——一六九

奥利根のかくれキリシタン

まぼろしの東庵記——一九〇

移住の旅——一九七

愛と受難——二〇七

奥利根に潜む信徒——二二三

奥利根の位置——二二六

東庵欠落——二三四

血族の移動の悲運——二三五

関所とキリシタンの接点——二四

キリシタン墓地分布——二六

宗門人別改帳——二七

潜行したもの——二八

わが家の謎どき——二六

不思議な縁のおわりに——二九〇

今しばらくは生きざらめやも

短歌への招待

つい先頃、私は短歌をよむ人たちの大勢と九州の神話にかかわる土地をめぐる旅を終えて帰ったばかりです。

参加してくれた人は、北は北海道から東北、信越、関東、東海、中国、勿論九州全域からでした。この中には長く私の教室へ通ってこられた人も交っていましたが、これらの人として、初めは「五・七・五・七・七」と初句から五句まで指を折りながら、三十一字の詩型にまとめるという初心からの出発でした。その人たちは今は、はるかに上達し、ものの見方が深く進んでまいりました。

つまり目に見るものの「いのち」や「生きる」ということが、どのようなことかということを真実に考え、形の奥にあるもの、動きの底にあるものを見てとるように成長されました。私はこの人びとを見ていますと、この成長過程にわれながら胸があつくなるのを覚えます。たとえば霧島高原におり立ったときも、硫黄臭の流れるガレのかけまで覗き、そこに可憐に咲いている春りんどうを摘んで来しました。

「筆りんどうですね」

と私は言いますと

「この図鑑には、みやまりんどうとあります」

といい、手に持った小さい植物図鑑をひらいて、そこを指し示しました。歌をよみ、旅をよむ時には小さい植物図鑑を一冊もって歩くことです、と初めのころすすめたのは私でしたが、この人はそれをよく実行し、路傍の雑草などもよくしらべているのです。

花を調べるといふことは言いかえれば花のいのちを掬^{すく}いとる手だてでもあり、知ろうとすることは愛情のしるしでもあるのです。

「見るとも見えず」

ということを私は短歌を作らぬとき、よくきかされました。目をあいていても盲目同然だということでした。

無関心で生きるおそろしさを指摘されることしばしばでした。

短歌はまず、心をのべるものです。花鳥風月だけにとどまらず、その日、その時に心に感じたことを、そのまま三十一字にまとめて書けばよいのです。

かくいう私とて、初めて作歌しようとした日に、師匠はそうのように教えてくれ、まず指を折りながら作歌したものでした。私の歌友の中には若く十代から作歌した人も多くありますが、私は大学

を終え、家庭に入り、子の母になってから

「心の寄り場」

つまり自分の生きる寄りどころが欲しくて出逢^{であ}ったのが短歌だった、という偶然なことでした。したがって文学的にかくかく、という目標などあろう筈はありません。くらしに苦しみ、人間関係に悩んだあげく、出逢ったのが三十一字で、心の動きを書きとめうる短歌であったということでした。

今、私は短歌を書くことを教えていただき、まず手さぐりでぼつぼつ歌をよみはじめてよかった、と思うこのごろです。歌をはじめてから幾十年、いつかそれが私の心を支えてくれました。

春は花が心をやわらげてくれることも、悲しい時、花が曇って見えることも、月の光りが心を洗ってくれるような夜があることも、すべては、こちら側の心次第、訴えのあり方によるものであることを知ってきました。

立ち並ぶみ仏の像いま見ればみな苦しみに耐へしみますがた

今井邦子

この一首は、私の短歌の初めの師、今井邦子氏のものですけれど、仏という人間以上の存在であっても、それぞれにみんな苦しみに耐えてこられて遂に仏になられたのであろう、とよまれた作で

す。この頃の先生は複雑な悩みに苦しんでいました。みずからの苦しみがあれば、対象になるものもその心のかげりをうつす、という証拠にもなりましょう。

恥をしのんで、私の最初作った作品を御紹介しましょう。

ふりこめし二日の雨も晴れぬれば斑雪^{はたれ}うすれて山肌すがし

私は学生生活を終った年の秋、群馬の山国へ縁あって移住しました。どこを見ても山ばかり、雪の多い年でした。閉ざされて生きるくらしの重さ、夫しか知らぬ私には、この山国のくらしはきびしいものでした。

「待つ」

ということがどのように心を領するものかを知ったのも、この移住地でした。早く春が来るといい、と思いました。そしてようやく春がめぐって来ますと、今まで見たこともなかった山が雪解けの肌を見せはじめてくれました。

ああ、春がきた

と思った時のすがすがしい思いが、この風景を見たことによって触発されたのですが、何とも初めての作で、今思うと上皮^{うわかわ}を撫^なでまわしたにすぎぬのですが、それでもこの歌を見ますと、あの若

い日に、心迷っていた日のくらしが思い出されてくるのは不思議です。

「生きる日の記録」とも申せましょうか。

あの歌をよんだ日から、多少の断続はありましたが、今日まで私は歌を捨てることなく生きてき、また生きようとしています。

短歌を作ってきたために、私は物をていねいに見つめる姿勢をもつようになったとも思います。私だけではありません。私のめぐりで短歌をよむ人びとは、いつのまにか、性格が変わったのではないかと思われるほど、ていねいにすべてのものを見、また大切に対象をあつかうようになったのを知っています。

人間関係は更にその思いをひろげ、他人の思いをていねいに掬^くみとるようにさえ成長してこられます。

生きている幸を

物を思うということの幸を

私は短歌という三十一字の中へ、思いをこめる、訴えをこめるという詩型に長い年月育てられてきて、ようやく思うようになりました。

短歌を作らなかつたら、私の人生はもっと雑然とした荒涼な沙漠^{さばく}になっていたのではなかったか、と思うこのごろです。